

前壁の全層縫合を施す。以上の方法を用いた自験例のもとにその効果の程を報告する。

24) 腸回転異常を合併した Intraluminal duodenal diverticulum の1症例

岡 至明・飯沼 泰史
 小林 孝・伊賀 芳朗 (新潟大学)
 宮下 薫・吉田 奎介 (第一外科)
 武藤 輝一
 宮崎 裕・川口 秀輝 (同)
 成澤林太郎 (第三内科)

Intraluminal duodenal diverticulum に腸回転異常を合併した1症例を経験したので報告する。症例は38歳の女性で、昭和62年3月、心窩部痛、嘔吐、悪寒、戦慄、発熱を主訴に某院を受診し胆石を指摘され、当院内科を受診した。逆行性膵胆管造影にて Intraluminal duodenal diverticulum, 胆嚢結石, 総胆管結石と診断され、手術目的で当科入院した。低緊張性十二指腸造影, 小腸造影で腸回転異常を認めた。症状の改善を目的として胆嚢摘除, 憩室切除, 乳頭形成, T-tube drainage を施行した。憩室は Vater 乳頭の肛側, 右壁に存在した。

本症は1885年の Silcock の剖検例が最初であり、欧米で86例, 本邦で14例の報告がある。発生要因としては、不完全十二指腸隔膜説, 消化管重複説が考えられている。

25) 腸閉塞の治療経験

村山 裕一・長谷川正樹 (村上病院外科)
 小山俊太郎・清水 春夫

過去4年間に手術に至った腸閉塞症44例中、29例を対象として入院時における病態の把握, 治療方針の決定及び手術のタイミングについて検討した。緊急手術9例, 待期手術20例でこのうち6例は大腸癌であった。緊急手術例と待期手術例で入院時の検査所見と症状を比較した。脈拍及び白血球数は緊急手術例で有意に多く、ガス分析では BE の有意の低下を認めた。また緊急手術例では腹痛の強い症例が有意に多かった。待期手術例の中で大腸癌症例の特徴につき検討すると、年齢では差を認めなかったが6例中4例は75歳以上であった。発症から入院までの期間は他群の平均3日に比べ10日と大腸癌症例で有意に長く、入院から手術までの期間は平均5日と他群の12日に比べ有意に短かった。症状では有意差はなかったものの、大腸癌症例では症状の軽い症例が多くみられた。以上より高齢者で比較的経過が長く、症状の軽いイレウス症例を診た場合は大腸癌を疑うべきものと思われ

た。

26) Peutz-Jeghers ポリープ症例の検討

—ポリープの癌化と治療方針について—

須田 武保・鹿嶋 雄治
 山井 健介・井上雄一朗 (新学大学)
 下田 聡・畠山 勝義 (第一外科)
 武藤 輝一
 渡辺 英伸 (同)
 (第一病理)

胃腸管で特異な組織像を示す Peutz-Jeghers (以下 P-J と略す) ポリープについて癌化率および同ポリープを有する患者の治療方針について検討した。P-J ポリープ408個 (41症例) のうち5個 (1.2%) に癌化が認められた。大きさ別にみると、1cm未満では癌化は認められなかったが、1cm～3cm未満で2個 (1.6%)、3cm以上では3個 (15.8%) に癌化を認めた。この癌化は P-J ポリープ内に発生した腺腫が関与していると推定された。P-J ポリープ症例では3cm以上のポリープは癌化の可能性が高いので、症状の有無にかかわらず切除する必要がある。

27) 回腸末端癌の1例

島村 公年・小田 幸夫 (済生会三条病院)
 高桑 一喜 (外科)
 畠山 勝義・武藤 輝一 (新潟大学)
 (第一外科)

小腸悪性腫瘍は比較的稀な疾患といわれている。今回、我々は、早期胃癌を合併した小腸末端癌の症例を経験したので報告する。

症例は、52歳の男性。近医にてイレウスの診断を受け紹介来院。症状は数日で改善した。虫垂切除の既往はあったが、他の原因検索のため精査。上腹部 VS 及び CT。大腸内視鏡では異常は認められなかったものの、胃内視鏡にて早期胃癌を認めたため手術を予定。術前処置のため下剤を服用したところ、再びイレウス症状を呈した。その原因検索を含め、予定通り手術を施行。回腸末端部に腫瘍の形成を認めた。胃全全摘術及び右結腸切除術を施行。病理組織学的検査の結果、回腸末端部の病変は進行癌であった。

28) 小腸腫瘍による成人腸重積症の1例

大森 克利・広田 正樹 (白根健生病院)
 福田 稔 (外科)

今回、我々は小腸腫瘍による成人の腸重積症例を経験した。

症例は23才女性で、約2ヶ月間にわたりイレウス症状